

令和2年度第1回鎌倉市青少年問題協議会 議事概要

【日時】 令和2年7月29日（水）10時30分から11時30分

【場所】 鎌倉市役所 第3分庁舎 講堂

【出席者】 :敬称略

(1) 委員 10人

別紙名簿のとおり。

(2) こどもみらい部

平井あかね（こどもみらい部長）

瀬谷公重（こどもみらい部次長兼青少年課長）

(3) 事務局 3人

芳賀弓子（青少年課課長補佐）、田中翔太（青少年課担当係長）、渡邊千晶（事務職員）

【資料】

1－(1) 青少年問題協議会 委員名簿

1－(2) 子ども・若者育成プラン(案) 事前配布

1－(3) 学校の臨時休校期間中に対するアンケート調査(案) 事前配布

1－(4) 第3次鎌倉市総合計画第4期基本計画抜粋

1－(5) 鎌倉市教育大綱

【概 要】

(1) 自己紹介

(2) 副会長の選出について

(3) 議題

子ども・若者育成プランの改定について

概要については以下のとおり。

(1) 自己紹介

- ・各委員が自己紹介を行った。

(2) 副会長の選出について

- ・副会長は県立高等学校長会鎌倉湘南地区代表・深沢高等学校長の萩谷委員を選出した。

(3) 子ども・若者育成プランの改定について

- ・事務局から、平成 28 年及び令和 2 年の成人のつどいで実施したアンケート結果、令和 2 年 4 月に実施した鎌倉市新採用職員へのアンケートの報告を行った。

各委員からのご意見、ご提案は次のとおり。

加藤会長：アンケートの内容、基本方針について意見があれば。

対象は高校生から 30 歳までを対象としており、成人のつどいの際にアンケートをとった。内容、悩みとしては進路が多く、友人関係も増えているなど、人間関係のものが増加している。

若木委員：成人のつどいのアンケートをとって分析をしているが、分析された結果が記述されていない。分析した結果の問題点や改善点が見られず、アンケートをとっているだけになっている。来年度プランの改定ということで、昨年度の子ども・若者育成プランの改訂版を見ているが、評価は誰がどのように行い、どのように改定の手順を組んでいるのか。

瀬谷次長：アンケート結果については、これからご意見をいただきながら分析を深めていきたい。

2 点目の改定の経過については、令和 2 年度末までの現子ども・若者育成プランでは主な重点目標では青少年の居場所づくりと社会参画の推進、支援体制の充実、3 本柱で進めてきたところである。

そのうち、支援体制の充実、特に引きこもり、ニートの関係については市全体の中で福祉部門で一括して取り組んでいくという整理を昨年度末行った。その結果が、資料 4 の第 3 期鎌倉市総合計画第 4 期基本計画に反映されたところである。この第 4 期基本計画の市の計画の整理を行った。現行プランについては、昨年度末まで実施していた項目については作業を進めている段階であるため、この場で示すことはできないが、流れとしては、今までの現行計画の作り方と変わってきているとご理解頂きたい。

加藤会長：まとめると、市の取り組みが、青少年の居場所づくりと、地域の担い手となる青少年の育成という大きく 2 つになっている。

昨年は、青少年の支援をしようということで、特にひきこもりやさまざまな問題を抱えている子ども達を支えようという内容もあったが、その部分については福祉部が対応をすることとなった。具体的な事業として、青少年課ではかまくらっ子推進事業、育成事業、青少年会館の管理運営となる。

質問のアンケートの分析はまだされていないため、この場で意見を出し、もう一度内容について深めていくといった内容だが、若木委員いかがか。

若木委員：内容としてはわかったが、「居場所」という言葉、これは1985年、昭和60年の国際青年年からその言葉が出ているが、鎌倉市の「居場所」というのは何があって問題になっているのか。30年近く語られてきている中で、鎌倉市としてどういうことが問題になっているのか。

加藤会長：鎌倉市として、なぜ「居場所」を問題として出したのかについて、いくつか回答いただくと議論ができるがいかかがか。

瀬谷次長：鎌倉市の計画で初めて行ったのは、子ども・若者育成支援推進法が策定されて、それを受けて鎌倉市でも計画していくこととなり、当時、国からも居場所、青少年の居場所を検討していくべきではないかとなり、この法に則り議論してきた。居場所を一言で表すこと、定義することは非常に難しいと感じている。

箱ものをイメージし、当時、青少年会館2施設で、高校生以上の方が参画してもらえるようなプログラム、講座等を実施し、居場所づくりをしていこうと取り組んできたが、今の高校生は忙しく、1か月前から申し込んで、参加することは難しいということ、2年程取り組んできた中で感じてきた。

それでもやはり居場所が必要であり、何が必要なのかといった点で、平成28年の成人のつどいでアンケートを実施すると、箱ものではなく、誰かと一緒にいられるスペースが欲しいのか、そのスペースはどういったものなのかという内容であり、平成28年に改定した第2期の子ども・若者育成プランでは、その内容について迷いながら取り組んできた。

その中で、改めて成人のつどいのアンケート、またコロナ禍の中で当事者の方々はどういったところに居場所を求めてきたのかを、今回の計画に少し盛り込みたい。本来成人のつどいのアンケート、新採用職員アンケートの結果を分析して示すことができればよかったが、ご意見をいただいたうえで、アンケートをとってその結果で分析をしていった方がよいのかと考えている。

加藤会長：子どもの居場所は、通常、家庭、学校、地域であり、一番多いのは学校である。学校の中で子ども達はどのようなことを求めているのか。居場所を求めているのか、居場所は場所なのか、人との関わりなのか。現場の先生方は、今の子どもたちの居場所、子どもたちが求めているものについて何か意見があれば。

伊藤委員：中学校では分散登校が始まり、クラスの半分が登校し始めたところ、不登校の生徒数が減少している状況である。現在もそれが続いており、3ヶ月間、子どもたちは自宅で家族と生活を通して、人との関わりを感じたのではないかと。夏休みが短くなり、学習をしなければいけない中で文句を言う生徒は見られなかった。

子どもたちにとっての居場所は、箱ものではなく、人との関わりが重要なのだと思う。少人数規模は過ごしやすいという言葉も出てきていた。

杉並委員：子ども達が居場所として学校を求めていると感じる。家庭での居心地の良さは確かにあるが、保護者も子どもも長く一緒に過ごすとなると閉塞感が強くなる。休校中の子どもたちは、友人たちと公園で会ったり、一緒に散歩に出たりすることで、つながりができていた。学校が始まってみると非常に楽しそうに毎日生活している。

中野委員：仕事相手が10~20代対象であり、共通して感じるのはコミュニケーションの取り方が苦手なのだという。家庭、職場、友人関係であったり場面は違うが、もう少し要領よく人と話せ

れば、その人の課題は7, 8割解決できると感じる場面があった。人間関係に悩まれる方、一人が良い等つながってくる。これから青少年のための施策を行うときの一つの視点としてコミュニケーションスキルの観点から施策を充実させることもポイントととらえている。

加藤会長：石井委員いかがか。

石井委員：青少年の居場所というのは、若い母親世代、高齢者、どの世代においても居場所がない、居場所が大事、世代間交流が求められている。

青少年の場合、小、中学校、高校、大学等、一日の学校に占める時間がほとんどとなっている。学校が居場所になっている子もいれば、そうではない子もいる。

今回のプランを見て、もっと地域の中で若者を育てていこうという視点に立った場合の居場所を考えていかなければならない。

加藤会長：子どもたちにとっての居場所、どんな居場所を求めているかという議論が出ているが、千代委員いかがか。

千代委員：民生委員もやっているが、地域では地区社協の活動もしている。今回の子どもたちの居場所づくりは地区社共の課題でもあり、子ども達の課題についても企画をたてているところ。地域の中で居場所を作りたいということで活動をしているが、居場所といっても子どもたちになかなか来てもらえていない現状である。大規模なものより、小規模のものの方が人気がある。腰越行政センターでは、午後3時頃になると、ロビーには子ども達が集っており、ロビーの椅子は子どもたちが4席の椅子に対して6人くらいひしめき合って座って過ごしている様子が見られる。子どもたちにとってはこのような場所が楽しいのかと思う。ルールがあったり、予約制だったりではなく、秘密基地のような、もぐりこめるような場所を求めており、それを尊重しながら、場所を設定することが求められているのかと思う。

長谷川委員：自分がサラリーマンで、新型コロナの影響により、自宅で過ごすことが増えたが、子ども達同様まさに新型コロナを通じて、外で集まる場所の重要性を感じている。公園も閉鎖になったり、遊びにくくなったが、吐き出し口がないと子どもたちは辛いのではないのかと思う。多様な人間関係、居場所を見つけていくことが重要なのだと思う。公園等があれば、家庭で居づらい子どもに対して、近所の方が声をかけて一緒に過ごす等、いわゆる斜めの関係づくりが、大切になってくるのかと思う。

加藤会長：萩谷委員、高校生はいかがか。

萩谷委員：成人のつどいのアンケートの居心地の良い具体的な場所(4-1)は自宅、居心地の良いと感じる場所(4-2)は一人の場所が令和2年は62%と増加している。基本的に若者は一人の場所を求めるものの、一人でいるのは怖く、自分が送っている日々はこれで正しいのかという不安があったりして、そういう意味で学校、アルバイト先などに回りの人たちの様子を確認する場所が欲しいのではないかと感じている。

居場所ということで、どんな居場所を与えるのが大事で、ボランティアをやりたい子が増えている中で、そういうことのできる居場所、今後の人生でのモデルとなるような異年齢の人たちと関わる居場所、何か目的のある場所を作ってあげるのが必要。

齋藤委員：市で居場所づくりを考え、心のケアをしなければならないという大事なところに力を入れているところに良さを感じている。

コロナ禍の中で、必要なのは気軽に寄ることができる場所、安心していられる場所。日頃ストレスを感じている親も子も、あっけら感としていられる場所が欲しい。誰かの自宅の入口や階段等で楽しそうに過ごしている子どもたちを許す人、地域のような温かく見守りができる場所が大事。地域と連携していかなければいけない。

加藤委員：今日は結論を出すことはできない、今回頂戴した意見を、青少年課でまとめたうえで、今後の方針を出していくこととなる。初めに意見をいただいた若木委員はいかがか。

若木委員：一口に子どもといっても高校生や、小学生もいる。

居場所についてもいろんな場を用意していくことが必要。それには指導者、リーダーが適切に配置されていなければならない。それは先生や教職の人である必要はなく、楽しいおじさん、おばさん等地域住民がいる、だから行ってみたい、そういう場所があちこちに準備できたらいい。そんなような形で多くのリーダーが育っていく、その居場所を運営していくことが必要なのではないか。

加藤会長：続いて、一斉休校後のアンケートについて（資料3）、何か意見があれば。

石井委員：アンケートの目的は。

事務局：今回コロナの状況の中で、青少年がどういう過ごし方をしていたのか実情を知りたい。また、この施策に反映できるような形の質問ということで、今まで行っていなかった高校生、大学生を対象に実施しようと考えている。紙ベースとオンラインでの質問、発信となる。

石井委員：質問2の、二者択一は難しいのではないかと。良かったこともあれば悪かったこともある。

質問3に家族関係が出ていない。今回のことで家族関係、兄弟関係、親子関係、それぞれ学校、仕事があればぶつからなくてもいいような意見の衝突、知らなくてもいいようなことを知った等、お友達関係以外の家族関係にもある。

「その他」だけでは文言に起こしにくいこともあると思うため、選択肢として家族関係なり含めた言葉があるといい。

杉並委員：アンケートを実施するにあたり、成人のつどいは鎌倉市対象になっている。例えば新採用職員のアンケートは鎌倉市以外も含まれる。その自治体によって施策が違う部分があるとするとアンケートを調査するときに、どういう人を対象にするかによってアンケートの結果が変わってくる。土俵が違えば比較が難しくなる。

事務局：今回のアンケートについては、鎌倉市内にある高校、大学在学の方を対象としたい。

加藤会長：アンケートは試しにやってみて、新しい足りないところ、深めたいところは個別にアンケートを取るなど、丁寧なやることもできる。

若木委員：「不安になったことが何かありますか」、「その間に誰と会いましたか」や、当事者から思うことも入れたらよいのではないかと。

加藤会長：今回出た意見を踏まえて、一度出して頂き、意見を頂いた委員の方に見て頂き、修正しながら進めていくといいものができると思う。よろしいか。

中野委員：内容ではないが、回収率をあげるための考えはあるか？

事務局：今日おこし頂いている高校の校長先生方をはじめとし、学校は紙ベースでお願いしたいと考えている。子どもたちは紙ではなかなか回答をもらえないこともあるため、オンラインによ

る、QRコード等での回収を考えている。

加藤会長：今日は初めてのことで、みなさん色々なことを感じていると思う。次回またこの内容を進めていきたい。今日出された資料、意見を反映してプランの改定作業を行っていくことでよいか。

事務局：次回協議会を12月頃を予定している。スケジュールとして、これからアンケートの内容を修正し、アンケートの実施、集約をし、市役所庁内、パブリックコメントで意見を求めることとなる。12月にはだいたいの意見を盛り込んだ形で示すことができたらと思う。

今年度についてはプランの改定作業がある。次に2月、3月に出来上がった形で示し、計3回ほど青少年問題協議会の開催を考えている。

加藤会長：短時間だったが、良い内容がでてきたと思う。これを参考に作って良いプランにしていきたい。

以上